Contour
Evolving with you

コントアネクスト®
Clinical News
No.5

福岡市立こども病院内分泌・代謝科科長
都　研一 先生

Interview

1型糖尿病患者とデバイス
―生活にインスリン治療を合わせる
コントアネクスト® Link2.4がそれをサポート

施設（診療科）の概要
体制：医師3人、CDE 10人（施設全体）
小児1型糖尿病患者数：外来46人（うちインスリンポンプ使用者11人）、入院17人（2018年度）

福岡市立こども病院は九州で唯一の小児専門の高度医療機関で、日本糖尿病学会の連携教育施設（小児科）にも認定され、内分泌・代謝科では専門性をもった小児科医による診療が行われています。今回、西日本における小児の内分泌、糖尿病診療の中心として幅広く活動されている同科科長の都 研一先生に、小児1型糖尿病診療における目標、インスリンポンプの意義などについてお話を伺いました。また、血糖自己測定器コントアネクスト® Link 2.4についてのお考えや実際に使っている患者さんの感想などをご紹介いただきました。

将来自立できる十分な知識と能力を身につけてもらいたい

小児1型糖尿病の日常診療では「治療の主体はあくまでも患者さん」を念頭に、たとえ1型糖尿病という病気をもっていても、大人になって自立できる知識と能力を身につけてもらうことを目標としています。一方、医療者としては患者さんが適切な治療を継続できるようさまざまな視点からサポートし、必要に応じて最新の治療を提供していきたいと考えています。

これらを実現する上で、看護師、薬剤師、栄養士、臨床検査技師などを含むチーム医療の充実にも力を注いでいます。コメディカルのCDE*取得を積極的に勧めており、現在は看護師4名（CDEJ*2名、LCDE*2名）、薬剤師2名（全員LCDE）、管理栄養士3名（CDEJ 1名、LCDE 2名）、臨床検査技師1名（LCDE）がCDEの有資格者です。毎週月曜日の午後に糖尿病外来を開設しており、その時間帯は自己注射やインスリンポンプの取り扱い、カーボカウントをはじめとする患者指導、各種機器の管理・指導、検査データの管理など、スタッフがいつでもそれぞれの役割を果たせる体制を整えています。

*CDE（糖尿病療養指導士），CDEJ（日本糖尿病療養指導士），LCDE（地域糖尿病療養指導士）

まずは自己管理ができること

インスリンポンプ療法のデバイスの開発が進んでいますが、私が大切にしていることは、自己注射による管理、あるいは保護者がいつでも自己注射をサポートできる状態があって初めてインスリンポンプの導入を考慮検討するということです。つまり、患者さんおよび保護者が糖尿病という病態を正しく知り、カーボカウントによるインスリン単位数の計算、インスリン量の調節、自己注射や血糖自己測定の方法に加え、低血糖やシックデイへの対応も含めた糖尿病全般の基礎的な知識を習得しておくことが大前提ということです。これらの知識があって初めてさまざまな自己管理が可能となり、自立につながるのだと思います。このような状態にあれば、万一ポンプトラブルが生じた場合でも迅速かつ適切に対処することができます。

インスリンポンプに期待されるさまざまなメリット

自己管理ができるようになった患者さんについては、希望があればインスリンポンプへの切り替えを検討しています。また、インスリンの頻回注射法（MDI：multiple daily injection）で低血糖の問題がある患者さんにインスリンポンプを勧めるケースもあります。

インスリンポンプは、基礎インスリン注入量を生活パターンに合わせて自由に変更できるため、低血糖の心配が少なく、注射のわずらわしさから解放される有意義な手段だと考えます。CGM（continuous glucose monitoring）機能を搭載したSAP（sensor augmented pump）は、センサーグルコース値が一定の範囲を超えて上昇または低下した場合のアラート機能がついており、機能面と利便性において有用なインスリンポンプ療法だと思います。2018年には、低グルコースに達した、あるいは低グルコースを予測した時点でインスリン注入が一時停止されるという機能をもつミニメド

資料をご希望の方はこちらへ